
ソプラノは青空に

ルイス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソプラノは青空に

【Nコード】

N9625B

【作者名】

ルイス

【あらすじ】

異世界から、日本に逃げた『異常者』達を追って来た少年達。出会いと戦いの中で、彼らは何を見て、そして何を残せるのか。ほら、耳を澄ませば、歌声が聞こえる

プロローグ（前書き）

初投稿です。至らない所が多いとは思いますが、よろしく願います。

プロローグ

その日の空は相変わらず陰鬱な色だった。

人工的に作り出した電光が、巨大とも言える広さの石造りのホールを照らしている。

その光の下に、整然と若者達が並んでいた。

数にすれば、五十人はくだらない。

全員が例外なく黒を基調とする服装で、直立していた。

誰一人、身動き一つすることなく、視線をやや上に向けている。

彼らの視線の先には、自分達を見下ろすような位置に作られたバルコニーがあった。

白を基調に、このホールと同じく石造り。突き出た楕円の形で、標準体型の人間が五人立てるか否か、というくらいの大ささだ。

そこには、男が立っていた。

闇に溶けてしまうかのような真っ黒のローブに身を包んだ、初老の男。彼は、厳格な表情で、眼下に並ぶ若者達の顔の一つ一つを見定めるかのように見回すと、おもむろに切り出した。

「……諸君、事は一刻を争っている」

静寂のホールに、男の声が響く。

「首謀者は誰なのか、何故こんな事件を起こしたのか、そもそも首謀者など存在するのか……諸君らは明瞭な事が何一つ無い状態で送り出され、不安も多かるうと思う」

男は言葉を切った。次に吐き出すべき言葉を選んでいるかのよう

に。
「だが、諸君らを第一陣として派遣するのは、私をはじめとする執政官の全幅の信頼の故であることに偽りは無い」

男の声のトーンが上がる。

「必ずや、その身に宿る『能力』により、成果を上げてくれるものと確信している」

右手の拳が、力強く握られる。それは男の高ぶる感情を表しているようだった。

「……健闘を祈る」

男の声が響く中、ホール扉に一人の女性が寄りかかっていた。

「名演説ですわね、コンダクター指導者さん」

ふと、男から視線を動かせば、整然と並ぶ若者達が目に映った。

疑念など、一欠片も浮かべていない瞳。浮かぶのは、使命感と責任感という所だろうか。

それを見て、女性はクスリと笑い声を漏らした。

なんて純粹で、なんて愚かだろう。

そう心の中で、思いながら。

「これから何が起こるのかも知らずに……」

可愛いものね、と女性はまた笑う。

男の声に耳を傾けてみれば、どうやら演説も幕引きに差し掛かっているようだ。

熱が入っているのか、荒げる様な声で演説している男が目に入った。

それにちらと目を向けると、女性は扉から体を上げて、踵を返した。

耳に光る十字架のピアスが、人工の光を反射して輝く。

「また会いましょう。『信頼ある戦士』さん達？」

妖艶な声を残し、女性は消えて行った。

この日、五十人を超える若者が、派遣されて行った。
行き先は、彼らが住む世界とは異なる場所。

異世界だった。

第一章：『イレギュラー』

最近、急に暑くなった。

時鳥ときどり 理沙は、右手で熱くなった顔に微風を送りながら思った。
季節的には春の真っ最中のはずなのだが、反抗的な太陽は季節なんて何のそので、下を歩く人達を照らしている。

「あつー……」

その暑さは、思わず声に出してしまうほど。 理沙はセーラー服に紺色のセーターという、自分の格好に後悔すらしてしまう。
気まぐれな太陽を、少し侮っていたようだ。

「まだかなー……」

理沙は、目の前を走る道路を覗き込みながら呟いた。
彼女は現在、バス停にいる。

看板には大きめに『竹倉一丁目』と記されている。

十分ほど前からバスの到着を待っているもが、元々本数が少ない。
故にすっかり待ちぼうけの状態なのだった。

一応頭では分かっていたいかるのだが、彼女は退屈に耐えきれず、溜め息をついた。

彼女ははたから見れば明らかに学校帰りな格好をしている。

しかし、彼女がこれから向かう場所は家では無い。

彼女にとって、彼女の全てを変えたと言ってもいい場所。

「早く練習したいなー……」

これからの事を考えると、まるで幼稚園の時に初めて遊園地に連れて行ってもらった時みたいに、胸が高鳴って仕方がない。

すっかりさつきまでの退屈な気分が瞬時に消えてしまっている。
だが、そのことに彼女は気づいていないのだろう。

そんな事を考えていると、緑色の大きな車体がバス停に滑り込む

ようにして入って来た。

目の前で開いたドアをくぐり、バスに乗り込む。

今日は空いてるようだ。席も、後ろの方に二人程座っているだけで、他は空いている。

理沙は後ろから数えて三列目の、窓側の席に腰を下ろした。

車内に次のバス停を告げるアナウンスが響いている。

理沙はその声を、窓の外をみながら聞くとともに無しに聞いていた。

ここから、五分余り。そのくらいで、目的地にはたどり着く。

流れていく景色に目を移しながら、頭の中では決まったメロディが繰り返し繰り返し流れていた。

お気に入りの曲だった。

バンドを結成して間もない頃に、理沙自身が作った曲。

まだ、作曲に慣れていなかった頃に作った曲だったので、当時は自信なんてこれっぽっちも無く、不安だらけな中でメンバー達に見せることになった。

ところが、予想に反して、メンバー達の反応は上々。

それから練習を重ね、改善出来る所は皆の意見を盛り込みながら、この曲は完成した。

『ある風の日』。

そう名付けられたその曲は、理沙達を変えることにもなった一曲。思い出深い曲だった。

「あ、見えてきた」

理沙の目に、見慣れた光景が映った。

四角い造りで、回りの民家よりも大きめの建物。

レコーディングスタジオ。そこそが彼女の目的地だった。

「よーゼン。そっちはどうだった？」

「今のところ異常はナシ。至って平穩だよ……ロウの方は？」

「こつちも異常ナシだ」

少々クセのある黒髪に切長の黒い目。身長はさほど高くはない、外見で判断すれば高校生くらいの少年、『ゼン・ザヴィアー』は淡々とした声で告げた。

「一ヶ月経つて、まだ三人しか『送還』できてねえってのも情けねえ話だよな」

金髪に、蒼い目。ゼンと比べると、十センチほど身長が高く、がっしりとした体軀をもつ少年、『ロウガー・マクガネル』は金髪を掻きながら、つまらなそうに溜め息をついた。

二人は今、そろそろ夕陽の朱に染まりつつある『竹倉町』を歩いていた。

広い通りだが、人通りはまばら。辺りを見渡してもゼンとロウの二人と、時折二人を追い越して行く自転車くらいしか通っている者はいなかった。

二人は唯の散歩をしているわけではない。

何が悲しくて男二人つきりで散歩なぞするだろうか。

現在、ゼンとロウは巡回の真つ最中だ。

ゼンとロウの二人が配属されたチームの管轄内であるこの町を巡回するのは、当然ながら彼らの役目なのだ。

「姿を見せないんじゃ、仕方ないよ」

この世界に来て、早一ヶ月。

しかし、彼らに課せられた任務、『イレギュラー異常者』送還は、一行に成果が出ずにいる。

これまで送還出来た『イレギュラー異常者』はたったの三人。

出発の際の見たてでは、百人はくだらないのではないか、ということだったのだ。

しかし、三人目を送還してから早二週間前。全く音沙汰がなかった。

「もうちつとハデに暴れると思ったんだけどなあ」

「それは一部の奴だけだよ。とにかく、何かを壊したいって欲求にまみれてる奴」

「後の連中はこの世界に溶け込んで、息を潜めてるってか？」

「ああ。せつかく逃げられたんだ、あつちに逆戻りはしたくないだろっし」

『イレギュラー
異常者』とは、ゼン達の世界に拘留中だった犯罪者たちの事だ。それが一ヶ月前のある日、突然消えた。

しかも、あちらの世界で筋金入りの凶悪な者ばかりで、もはや更生の余地なしだ、と更生員も半ば匙を投げる程の人物が集まっている、『第五拘留所』。

そこに拘留されていた囚人達が、根こそぎ消えてしまっていた。

政府が大慌てで搜索したものの、行き先はどうやら『異世界』。

そして、調査と送還を目的にゼン達を派遣し、今に至る。

「ま、焦っても仕方ないか」

「そういうことだね……」

ゼンは応えると何気なく、頭上に広がる空に目を移した。

昼間は気味が悪いほど青かった空が、今や朱色がかかった表情に変わって行く。

また少し時間が経てば、次は吸い込まれるような暗黒に染まった表情に変わるのだろうか。

一つの空が、三つもの表情を持っている。

そのことは、この世界に来たばかりだったゼンを大いに驚嘆させた。

ゼンは、灰色の空しか見たことが無かった。それは、ロウや自分達と共にこの世界に来た人間の大部分がそうだろう。

ゼンのいた世界の空は、変わらない。

病んだような灰色をして、何食わぬ顔で自分達を見下ろしているだけ。

そのせいか、ゼンは空を見上げるのは嫌いだった。
それがどうだろう。今、ゼンは空を見上げ純粹に美しい、と感じている。

(何で、だろうな)

「おい、ゼン？ 聞いているか？」

「…………ん？ あ、ごめん。聞いてなかった」

突然ロウの怪訝そうな声が、ゼンを現実に引き戻した。

どうやら何度か呼んでいたらしいが、思考の世界に飛んでいたゼンには全く届いていなかった。

ゼンは素直に詫びを入れ、何だっけ、と聞き返す。

「だから！ 『SEA BREEZE』の話だって！」

ロウの熱が入った言葉に、ゼンはああ…………と半ばうんざりした様子で相槌を打った。

「その『シーなんとか』の話は聞き飽きたよ…………」

「『SEA BREEZE』だ！ 俺はまだ語り足りないぜ！」

その蒼い瞳の奥に、何か燃える物を宿して言うロウにゼンは額に右手をあて、溜め息をついた。

『SEA BREEZE』。

それは、現在人気上昇中のバンドの名前だ。

四人組バンドで、女性がヴォーカルを努めていて、そのヴォーカルの名前は『時鳥 理沙』と、いうらしい。

柔らかかなソプラノの声質で、一度聞けばハマること間違いないそうだ。(ロウ談)

オマケに、艶やかな黒髪に整った顔立ちの美少女としても人気があるらしい(ロウ談)。

ロウはこの世界に来て、『テレビ』というらしい映像装置の中で演奏していた『SEA BREEZE』に一目惚れしてしまったらしかった。

それ以来、ロウは『CD』というらしい音響記録ディスクを買い、

サルのように聞いている。ついでに、ゼンにも勧めてくるが、買う気にはならなかった。

「お前も聞いてみるって！ ハマるから！」

正直、この男が何故ここまでハマってしまったのか、ゼンには皆目見当もつかなかった。

と、ロウの熱弁を聞き流しながら歩いていると、突然ズボンのポケットが震えだした。

急いでポケットから、この世界の文明の利器である『携帯』を取り出し、通話ボタンを押した。

「はい、こちら『ゼン・ザヴィアー』。何かありましたか？」

「ゼン君！ あなた達今何処にいる！？」

「今は大通りにいますが……」

『良かった！ 捜索班から不審な人影が、その周辺にいるって連絡があつたわ！ 行つて確認して見てくれる！？』

不審な、人影。

「……了解しました」

ゼンがそう答えると、電話の声はお願いね、とだけ言って通話を切った。

携帯をポケットにしまい、ゼンの表情に緊張が走る。

「どうした？」

「不審な人影あり、確認しろってさ」

「そうか、どの辺だ？」

「この周辺らしいけど……」

と、ゼンは言葉を切った。

切長の両の目は、ある一点で止まっている。ロウもその視線の先に、目を向けてみた。

短い黒髪を逆立て、膝まで丈のある黒いコートを羽織っている男が、ゼン達がいる所から約百メートルの位置で、キョロキョロとしながら歩いて行くのが見えたのだ。

纏う雰囲気は普通ではない。

ゼンは直感した。

この世界にはそぐわない、異質な『気』のような物の存在を感じられる。

そう、自分達のような。

ゼンとロウは確信していた。

奴は『イレギュラー異常者』だ。

「やっとおでましか……散々待たされた落とし前をつけて貰うとするか！」

ロウは言って、ゼンと目を合わせた。

その目は、好きなバンドについて嬉々として語っていた時とは、また違う輝きを放っているように見える。

ゼンはロウに向かって、小さく頷いた。

それを合図に、二人は男を追う為に地面を蹴った。

第二章：『SEA BREEZE』

時刻は夕刻。

もう空が完全な朱色に染まってしまっていた。

日中の季節外れの暑さも、日が沈むと共になりを潜め、過ぎしや
すい涼しげな風が吹いてくる。

『竹倉町』のレコーディングスタジオ。

そのドアから出た所に、四人の男女がいた。

「よし！ 今日もお疲れさん！」

黒髪をツンツンと立たせ、少し目つきの悪い男^{たちばな}立花 響弥はうー
ん、と伸びをしてから言った。

「んー……今日は長かったねー」

「しかし腹減ったな……どっかで食って行かないか？」

茶髪のまつすくなロングヘアで、おっとりとした雰囲気^なを放っ
ている女性^{なかさこ}中里 和音が携帯電話で時間を確認する。

その隣でストレートの黒髪を結わいている男^{すがはら}菅原 刻広が、鳴き
出しそうな腹に手を当てて言った。

「お！ いいね！」

「んー、刻広くんの奢りならいいよー」

「お、おいおい勘弁してくれよ」

響弥も空腹だったのか、刻広の提案に喜々として賛同した。

和音も邪気の無い笑顔だったが、言った内容に刻広は思わず冷や
汗を流してしまった。

理沙はそんな三人のやり取りを見て、クスクスと笑っていた。

このバンド『SEE BREEZE』は、大学生二人、高校生二
人で構成されている。

理沙と響弥が、通う高校は違うが高校生、刻広と和音は、同じ大
学に通う大学生だ。

このバンドを立ち上げようと、最初に考えついたのは刻広だった。刻広は和音と共に別のバンドにも所属していたのだが、それを機に脱退。

その後音楽仲間でもあり、後輩でもあった響弥を誘い、そして響弥と面識のあった理沙を加えて『SEE BREEZE』結成となったのだ。

そういう訳で、彼らは大学生と高校生という間柄でも、まるでクラスメートであるかのように自然な関係でいる。年上でも敬語は使わないし、皆揃って食事にも行く。

今日のように、スタジオ帰りに食事の提案があるのも、しょっちゅうだった。

「理沙ちゃんも行くー？ 刻広くんが奢ってくれるって」

和音が理沙に柔らかな声をかけてきた。それに気づいた刻広は、承諾してないぞ、と慌てていた。

「うん、もちろん！」

理沙は笑って頷いた。

数十分後、四人はファーストフード店で食事を済ませ（結局ワリカンだった）、それぞれの帰路についてた。

夕暮れに包まれていた空も、若干薄暗くなっていた。

そんな中、理沙も薄暗い大通りを歩いていた。

昼間の賑わいは何処かに消え去り、今は静寂に包まれている。

明かりと言えば、道にぼつぼつと立っている街灯が頼りなさに光っているだけだった。

バス停に着けば、後は十分程度で家に着く。しかし、バス停までは若干距離があり、歩いて行くしかなかった。

ふ、と理沙の視界に人影が映った。

真っ黒なコートを羽織り、闇に溶けてしまいそうな格好の人影。体格から言って、男だろう。

(何だろう……)

その男は、理沙の進行方向とは逆に歩いてきていた。

それだけならば、ただの通行人なのだが、それだけではなかった。その男は、まっすぐに理沙向かって歩いてきているように見えた。暗くなってきていて表情が分からないのが、理沙に僅かながら恐怖を与えていた。

(考えすぎ、考えすぎ……)

理沙は自分に言い聞かせた。

その間にも、男はどんどん近づいて来る。

理沙は、歩くスピードを上げ、足早に通り過ぎようとした。

しかし、すれ違った瞬間。

「っ!!」

腕を、掴まれた。

理沙は反射的に、驚愕と恐怖の入り混じった表情で、男の顔を見上げた。

「……へへへ」

笑って、いた。

理沙は背筋に冷たい物が流れ、慌てて手を降りほどこうとした。

しかし、その力は強く、女の理沙の力ではびくともしない。

「は、離してくださいっ!」

震える声で理沙は言った。

しかし、男は力を緩める兆しも見せずに、さらに狂気じみた笑みを深めていくだけだった。

「いい表情かおだなあ……」

男はおもむろに、理沙を掴んでいない方の手を振り上げた。

理沙は、驚愕に目を見開いた。

その手には、鋭利な刃を持つ、斧。

「斬り刻みたい、くらいになあ!!」

理沙は思わずぎゅっと目を瞑る。

男がそう言った瞬間、大きな衝撃が襲いかかった。

しかし決して理沙に、ではない。

「え……?」

突然、理沙の耳に一発の打撃音が聞こえてきた。それと同時に、理沙を掴んでいた力が消え、バランスを崩して倒れそうになってしまふ。

視界には、理沙から二メートル程の所に落ちる男が映った。

そして隣には、いつの間にか居たのか、理沙をかばうような位置に立った黒髪の少年がいた。

「……怪我は?」

「え……えと、大丈夫、です」

少年は理沙を振り向かずに、淡々とした声で聞いた。

理沙は混乱した頭で、何とか返事を返す。

その見た感じ細身の少年が、あの男を蹴り飛ばした、という事実
に気付いたのは頭が冷えてきてからだった。

「ロウ、アイツは俺がやる。その子、任せた」

「はいはい任せられよつと……お嬢さん、危ないから下がってな」

これまたいつの間にか居たロウという金髪の少年は、軽い調子の
声をかけながら、

理沙を黒髪の少年から離れた。

「え、あの……」

理沙は、少年の言葉に耳を疑った。

(『俺が、やる』って……?)

無謀だ。

相手は、鋭利な刃物を持っているのだ。

この少年は何を言ってるのか。

「ま、待って！ あの人は刃物を……」

「まーまー。落ち着いてお嬢さん」

慌てている理沙に気付いたのか、またも軽い調子の声がかけられた。理沙よりも大分身長が高いので、上から声が降って来るようだ。申し訳ないが、外見からは想像できないほど柔らかで優しい声だった。

「ゼンに任しとけば、大丈夫だからよ」

「てめえ……」

斧を持った男が、緩慢な動作で立ち上がった。

その目はゼンを睨みつけ、表情は怒りに歪んでいる。

「何者だてめえ……俺の邪魔したら、どうなるか分かってるんだろ
うなあ!？」

「お前を、送還しに来た」

怒りを露にする男とは対照的に、ゼンは淡々とそれだけを告げた。それを聞いた男は一瞬、目を見開いて驚いた。しかし、すぐ後には喜びの表情を浮かべていた。

「ほほお……てめえ『俺ら側』か」

「だったら、どうする?」

「最近欲求不満でな……お前となら、楽しい殺し合いができそうだし……!」

男は、街灯の光を受けてきらきらと光る斧を構え、心底楽しそうに言った。

一方ゼンは、その男の様子を見て、小さく溜息をついた。

「破壊欲求の塊、か」

ゼンはその一言だけ呟くと、

閉じていた右手の拳をゆっくりと開いた。

理沙は、目の前に広がった光景がにわかには信じられなかった。

ただ点のような目で少年の手元を、食い入るように見つめることしかできなかった。

白い光の粒子のような物が、その広げた掌から現れる。

それらは、ゆっくりと浮遊しながら、何かを形作っていく。

そして、完全に何かを形作り終わると、それは白い光を放つ粒子から、実体と化した。

その数秒足らずの一連の現象が終わると、ゼンの手には有るはずの無い剣が握られていた。

「さて、やるうか？」

ゼンが言くと、男は楽しそうに笑った。

「お前を送還する」

ゼンの声が、もう一度告げた。

理沙はただ目の前の光景を、夢でも見ているかのような心地で見ている。

それが、幕開けであるとも知らずに。

第三章：『能力』（前書き）

一応受験を控える身ですので、更新は不定期です……

第三章：『能力』

「さあ、来いよガキ！」

「……じゃあ、お言葉に甘えて」

ゼンは、男の挑発に淡々とした声で答え、ゆっくりとした動作で剣を構えた。

黒い剣身の周りを白いライン縁取りがしているだけの、シンプルな造りの剣。

ゼンはそれを構え、右足を軸に若干前かがみになった。

男はその動作を見て、斧を握る手を強めた。

(突っ込んで来るな……単純な奴だ)

自分を棚に上げた男はそう確信を強め、獲物が飛び込んでくるのを、今か今かと舌なめずりしながら待っていた。

その刹那。

ゼンは消えた。

男は、自分の目を疑った。

何事か、と考える暇も無く、次の瞬間には右肩に鋭い痛みと衝撃が襲いかかって来ていた。

黒い衣服が破れ、鮮血がほとばしる。男はそれに気づき、驚愕の声を上げた。

「な……何だと……!？」

どこに消えた、と男は傷を押さえながら辺りを見回した。

「こっちだけど？」

「……!?!」

突然背中の方から声が聞こえ、男は弾かれたように振り返る。

だが、そこにもただ暗い夜道が見えるだけ。ゼンの姿は無い。そしてまたしても、先ほどと同じ痛みと衝撃に襲われる。今度は右足。

「クソが……!」

(どこに居る……!?)

男は、悔しそうに齒噛みしながらもゼンを見つけようと、目を凝らした。

すると、トン、という軽やかな靴音が男の耳に届いた。男が目を見張れば、まるで何事も無かったかのように、男の前に一人の少年が立っていた。

「デメエ……」

「付いて来れない？」

男は、そのゼンの呟きを無視し、一直線に駆け出した。

そしてその勢いをそのままに、闇夜に映える銀色の斧をゼンに向かって振り下ろした。

しかし、ゼンは鋭く高い金属音を響かせながら、右手に持った剣でその一撃をなんなく受け止める。男は思わず驚きに目を見開いてゼンを睨みつけた。

ゼンは剣を握る両手に力を込めた。ゼリギリと刃物と刃物が擦れ合う嫌な音が辺りに鳴り響く。

「……どんな手品だ、ガキ」

「……手品、ね。アンタも『あちら側』の人間なら、考えれば分かるだろう？ タネが、さ」

ゼンはそう言うと、鏢迫り合いの状態から、男の斧を弾き飛ばした。

そして、間髪入れずにまた消えるように動き、男の背後に回り、背中に一筋の傷をつける。

ゼン達『異世界』の人間は、この世に生まれ落ちた時から、必ず一つ、特別な能力を授かっている。

そして、その能力と対になる武器。それを己の体に満ちる力から具現化することで、初めて能力は発現するのだ。

「俺の能力は、自分自身の『速さ』を何倍にも速くできる」

「ちっ……！」

振り返りざまに振るわれた斧の刃は、虚しく空を斬った。

斧を素早い身のこなしで避けたゼンは、切れ長の目を一層鋭くし、男へ向かって跳んだ。

おそらく、男がそれを認識できた時には、既に己の身は崩れ落ちていただろう。

低い悲鳴を上げ、男はばかりと夜道へうつぶせに倒れ伏した。

「……………」

起き上がって来る気配が無い事を確認すると、ゼンはふっと溜め息をついた。

彼の握る剣が、白く光る粒子に戻り、消えていく。それは、戦闘の終わりを意味していた。

するとゼンは、ゆっくりと倒れている男に近づき、しゃがみこんだ。

そして、左手を首筋辺りに当てる。その左手には、灰色でゴツゴツとした機械的な指輪のような物がはめられていた。

「座標確認…… B 1 3 2 1 2 2 1 5 1 ……」

ゼンは呟き、右手の人差し指で指輪をちょこんと触るような素振りを見せた。

すると、突然。

男の体が、光に包まれた。

白というよりは、黄色に近い光。それは男を包み込むと、だんだんと薄くなっていく。

そして、次の瞬間には、跡形も無く消えていた。

「送還……完了」

ゼンは、静かに呟いた。

「よおゼン、ご苦労さん」

後ろからかけられた声に振り返れば、そこにはロウと一人の少女が立っていた。

「どうやら下級中の下級だったみてえだな」

「まあ……楽に終わるなら、そっちの方がいいよ」

つまんねーの、と不満そうなロウの声を聞きながら、ゼンはふと視線をロウの隣に移した。

紺色の服に、紺色のスカートとかいうらしい衣服。

黒く長い髪が背中まで垂れていて、顔つきも幼さがあるものの、目鼻立ちが整っていて美人と言っても過言ではない。

「あ、あ……の……あなた達は……一体……」

そんな少女が、怯えたような驚いたような、いろいろな感情が混ざり合ったような表情でゼンを見ていた。

ゼンは、今までの自分の行動を思い出し、内心しまった、と思った。

(そういえば、見られてた、な……)

隣のロウを見れば、まあいいじゃん、みたいな顔をしている。ゼンは額に右手を当て、小さく溜め息をついた。

「……いいか？ 君は、何も見ていない」

「え……？」

ゼンは理沙に向き直って、低い声できっぱりと告げた。

理沙は言われた事がよく分からず、不思議そうな声を出した。

何も、見なかった？

「君は、ただ夜道を帰っていただけだ。誰にも会わず、何も起きなかった……」

「だ、誰にも……？」

理沙は、目の前に立つ少年の言わんとする事が分かった気がした。つまりは、忘れる……と、いうことなのだろう。

「どうして？ あなた達は、何者なの？」

理沙は、まくし立てるように言った。

「あ……ソイツは言えねえな。悪いけど……」

理沙の言葉に、ゼンの隣のロウは、眉を下げてバツの悪そうな顔で答えた。

そう、言えないのだ。

こちらの世界の人間には。

ゼンはまた一つ溜め息をつくど、くるりと体の向きを変えた。

「……行こう、ロウ」

「……ああ」

ゆっくりと歩き出したゼンに、ロウも続く。

「ち、ちよつと……！」

理沙は慌てて追いかけてようとすると、ゼンはピタリと足を止めた。

「その方が……」

黒い髪が、突然の夜風に靡く。たったそれだけの光景に、理沙は止まった。

その後ろ姿は、酷く神秘的に見えた。

すぐそこにいるのに、手を伸ばしても、届かないかのように。

そして理沙はその事に、絶望しているかのように動けなくなった。

「身のためだよ」

2つの後ろ姿は、ゆっくりと遠ざかって行く。

理沙は、その姿を呆然と見つめていた。

動く、という事を忘れてしまったかのように。

第四章：『掟』（前書き）

今回はなんだか短めです。

第四章：『掟』

「……申し訳ありません」

「……あのねゼン君。いきなり謝られても、事情がよく分からないんだけど」

やって来て開口一番に謝罪の言葉をぶつけてきた部下に、思わず呆れた声を出した女性がいた。

黒くスマートなジャケットを羽織り、青い生地ジーンズ。長めの髪は赤茶色、色白な肌とは対照的な赤い瞳。

『セレン・ミルハート』。

ゼン達のチームを取りまとめる役目を担っている人物だ。

「……見られてしまいました。戦闘の様子を」

「『こつち』の人に……？」

セレンの問いかけに、こくりと力無く頷くゼン。

それを見てセレンは小さく溜め息をついて、腕組みをした。

ここは、『竹倉町』に佇むとあるマンションの一室。

階数は10を超えていて、高層マンションに部類してもよさそうな高さだ。

建てられてからあまり年月が経過していないのか、壁の色などがまだ新しい雰囲気を出している。

そのマンションの8階の803号室。

そこが、今二人のいる場所だった。

このマンションは、こちらの世界にいる間、ゼン達のチームの隠れ家となっている。チーム全員に1人に個室が1つずつ与えられ、巡回や送還の任務が無い時は部屋で待機（という名の休憩）などに使用している。

「もっと注意を払うべきでした。頭に血が昇っていて……」

昨夜の『送還』から一夜が明けていた。

大体のあらましを説明し終えたゼンは、何処か気落ちしたような声で言った。そして、上官であるセレンに向かって謝罪の意をぶつけているというわけだ。

「仕方ないわ……あなたはその子を助けようとしたんでしょ？」

「しかし……」

1人の異常者^{イレギュラー}を、甚大な被害が出る前に送還できて幸いだっただ。

しかし、その際に一人の少女に戦う姿をばっちりと目撃されてしまった。

ゼンたち『異常者討伐隊』に課せられた鉄の掟。

異世界人とは、深い関わりを持つてはならない。

この世界の人間は、自分たちが身を置いているこの世界とは別の世界があることを知らない。おそらくこれからも知らずに生きていくのだから、なにより知る術もない。

そんな人間達に、可能性を見せてはいけない。

自分たちが現れた事で、この世界の歩みべき未来を変えてしまうわけには行かない。それゆえに、昨夜のことは、掟に背く行為だった。ゼンとしては、処罰も覚悟している心持だった。

「男なら、過ぎたことをうだうだ言わないの」

「……はあ」

ずいっと寄ってきて、鼻先に人差し指を突きつけてきたセレンに、ゼンは呆けたような声を出してしまった。一方のセレンは、笑っていた。

まるで、手のかかる弟を見守るかのように、優しい目で。

「ゼン君は真面目すぎるのよ。ロウ君くらい軽く行かなくちゃ、いつかパンクしちゃっわよ？」

「……」

それは軽すぎです、とは口に出さないうで置いた。

「はい、そういうことだから、特にお咎めは無し。大体、『見られないように』なんて一応命賭けてるあたし達には無理な話よねえ」

「……はあ」

上層部に聞かれていたらやばいですよ、とか一応なんですか、とかはやはり口に出さないで置いた。

セレンはそう言うのと席を立ち、部屋を出た。

すると数分もしないうちに、彼女は書類の束を両手で抱えながら戻ってきた。

普通よりも何倍かの厚さを持つその束を見て、ゼンの背筋を嫌な予感が襲ったのは言うまでもない。

「……それは……」

「そ 報告書。一応三日くらいで提出してね」

「量が、多すぎる気がするんですが」

ゼンがセレンに抱えられた紙の束を指差して言うと、セレンは先ほどの優しい笑みとは違う、無邪気な子どものような笑みを浮かべた。

「ゼン君、ついでにあたしのもやっつといてよ」

「……自分のは自分でやりましょうよ」

「だって面倒くさいんだもん」

(出た……セレンさんの面倒くさがりが……)

時には、ゼン達部下が身震いするほど圧倒的な力を見せ付けるクセに、普段では年齢は二十歳を越えているのに、どうしようもなく子どもっぽい。その上極度の面倒くさがりだ。

ゼンが報告書を押し付けられた数は、両手で数えても足りないほど。

「……分かりましたよ」

ゼンは、深い溜め息をつきながら、セレンの抱える紙の束を受け取った。当のセレンは、ゼンがわりとすんなり受け取ったことが意外だったのか、ぽかんとした表情を浮かべていた。

「処罰にしては、軽いかもしれませんが」

「ほんつと真面目ね、ゼン君」

呆れたような、感心したような声を背中に聞きながら、失礼しま

したと告げ、ゼンは部屋を後にした。

とある学校の、とある教室。

そこに、頬杖をつきながらぼーっとしている少女がいた。

「……沙？ 理沙？ 聞いている？」

「えっ……？」

彼方へと飛んでいた理沙の意識は、かけられた声によって一気に現実に戻ってきた。

声の方に顔を向けてみれば、そこには不思議そうな顔で理沙を覗き込んでいる友人がいた。

「あ、何？」

「何？ じゃないよ……もう昼休みだよ？」

友人の言葉に慌てて教室にかけられた時計を見れば、4時間目の終了時刻をすでに数分過ぎている。

(全然気がつかなかった……)

この分だとチャイムも鳴ったのだろうが、理沙の耳には全く届かなかった。そういえば、周りがかやがやと騒がしい。

「ごめんぼーっとしてた」

「理沙、今日1日そんな感じだよ？ 大丈夫？」

心配そうな友人に、大丈夫だよと笑顔で返した。

昨夜の出来事が、理沙の頭に染み着いて離れなかった。

授業中も、どうやら知らず知らずのうちにその事を考えてしまっていたようだ。朝登校してから今までの記憶が、断片的にしか残っていない。

あの後暗く寂しい夜道に1人残されてから、どうやって家まで帰ったのかよく覚えていない。もしかしたら、夢だったのかもしれないと思さえもした。

しかし、絶対に現実だったと、確信している自分がいた。

その方が、身のためだよ。

そう言い残して、去って行った少年二人。確か『ゼン』とか『口ウ』とか呼ばれてたような気がする。

何も無い空間から、剣を出して戦う少年。倒した男を、不思議な光に包んで消してしまった少年。

遠い、後姿。

(ほんと、何者なんだろ)

「理沙ってば！」

友人の再度の声も耳に入らず、理沙は思案に耽っているだけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9625b/>

ソプラノは青空に

2010年10月10日02時47分発行